



宮島町

人口：「2,168人」
 (平成14年4月末、住民基本台帳による)
 面積：「30.39km²」
 町の花：「あせび」
 町の木：「もみじ」
 町の鳥：「やまがら」
 キャッチフレーズ：
 「自然・文化・歴史の息づく島-宮島」

—自然と人間の共生する交流の島 みやじま—



光の祭典、水中花火大会

険峻な山塊がなだらかな稜線を描いて瀬戸の海に続く姿に、ある人は「観音さまの寝姿」を連想したそうです。濃い緑の山懐の干潟で、朱色に彩られた大鳥居が厳島神に詣でる人たちを迎えています。

宮島の夏、おかげんさん・十七夜と親しまれている厳島神社管絃祭は、広島湾岸・西瀬戸内海に生きる人たちの海の祭典です。

旧暦六月十七日の管絃祭に先立つて、御座船の通路にあたる大鳥居以内の砂浜は、広島市から大竹市にいたる沿岸の人たちによって浚深されます(御洲堀)。

神を奉載し管絃を奏する御座船、対岸廿日市市の地御前神社に御座船を曳航する漕ぎ船や進路を示す燈明船、そばにつき従う御供船。「厳島御用」の幟を立てそ

れぞれの役割を持った船は、倉橋町・呉市・広島市・廿日市市・能美町などからやって来ます。沿岸各地からは参詣船が大漁旗をなびかせて集まります。神の傍らで操船・演奏の任に当たった人たちは、この祭のために日々技を磨いています。

また、海辺に並ぶ仮設の店では、昂揚した喧騒の中でさまざまなものが商売されています。この活気に満ちた空気の中で一年間の小遣いを使い果たし、また来年のおかげんさんを楽しみに一生懸命働こうという参詣者もいます。

管絃祭のクライマックス、深更の回廊に囲まれた狭い空間で三回廻る漕ぎ船と御座船。この神技を目の当たりにした参拝者は、それぞれの思いを込め船に賽銭をうっています。満潮を期しての還御は、干満に左右されるため、管絃祭は旧暦を基準にして行われます。

こうして執り行われ続けている管絃祭は、数百年前から担う人たちの世代こそ変わるものの同じ形式をそのまま伝えていきます。

宮島は、瀬戸内海のどこにもあるごく普通の島だったはずですが、しかし神が鎮座され、永久の幸福を願う人たちが集まることからその独特な歩みが始まります。神仏の前での祈願は、舞楽や供養を伴い、その証にお札を持ち帰っていました。こうした奉納のための芸能は、神仏を慶ばすばかりでなく、集まった人たちを歓喜させ、日常で

は経験することのない別世界へ誘うものでした。こうして祭礼を中心に訪れる人々との交流・交歓が、島の人たちの生きる術となりました。

瀬戸内に暮らしてきた人たちは、海産物を採取し、海上運搬に携わるばかりでなく、山地の斜面を耕作し、海岸の砂浜で塩を作ることで生活してきました。今、目にするこ

とができる沿岸の変わりつつある景観は、瀬戸内を特徴付ける地形や天候と向き合い、巧みに自然に手を加えて生きる術を見つけて出している人たちの生き方を物語っています。

人々の交流の舞台となってきた宮島は、樹木に覆われ、古来の姿をそのまま伝えていきます。そして、その変わらぬ姿が、今あらためて人々に感銘を与えています。

宮島の世界文化遺産「厳島神社」は、こうした継承された形の中に込められた瀬戸内の生き方のひとつ交流・交歓を示すものです。

地球の温暖化による海面上昇は、海辺にある厳島神社やベネツィアの町の姿を変えるであろうといわれています。ある時には脅威ともなる自然の中で、豊かな海の恵みを見出した瀬戸内の人たち。広島湾の入口から、瀬戸内の分かち合う喜びと確かめ合う勇気を、そして時の永遠なることを信じる新たな生き方を、海外に発信しなければなりません。今年の旧暦六月十七日は、七月二十六日に当たりま

す。

す。

す。

す。

■宮島町のイベント情報■

(平成14年)

管絃祭 7月26日(金)
 玉取祭 8月11日(日)
 水中花火大会 8月14日(水)
 宮島産業まつり 11月9・10日(土・日)
 鎮火祭 12月31日(火)

(平成15年)

第19回宮島かき祭り 2月8・9日(土・日)
 (問合せ先) 宮島町役場観光課
 TEL(0829)44-0008
 E-mail:miyajima@hiroshima-odas.or.jp



管絃祭：御座船の還御